

研究成果の発信

地球研では、研究成果を広く社会に還元するため、一般市民や研究者を対象にしたシンポジウム、フォーラム、セミナー等のイベントを開催しています。また、総合地球環境学に関するさまざまな刊行物を積極的に出版しています。

● 地球研国際シンポジウム

地球研の研究成果を世界に発信することを目的として、国内外の学術コミュニティを対象に年1回開催しています。その年度に終了する研究プロジェクトの研究発表を中心に、最新の研究活動や海外諸国の地球環境研究の現状を紹介しています。

テーマ	開催日	場所
第6回 人間社会の未来可能性	2011年10月26日-28日	地球研講演室
第7回 アジアからの発信 — 変わりゆく社会と環境(仮題)	2012年10月24日-26日	地球研講演室



第6回地球研国際シンポジウム
「人間社会の未来可能性」



第10回地球研フォーラム
「足もとの水を見つめなおす」

● 地球研フォーラム

地球研の理念や研究成果に基づいて、地球環境問題について幅広い提起やディスカッションを行うことを目的に、年1回開催しています。2004年からは広く市民の理解に供するために、その成果を『地球研叢書』として刊行しています。(地球研叢書については17ページを参照)

テーマ	開催日	場所
第10回 足もとの水を見つめなおす	2011年7月3日	国立京都国際会館
第11回 “つながり”を創る(仮題)	2012年7月8日	国立京都国際会館

● 地球研市民セミナー

地球研の研究成果や地球環境問題の動向を分かりやすく一般市民に紹介することを目的に、本研究所または京都市内の会場において定期的に開催しています。会場からは熱心な質問が毎回よせられています。2010年度から、夏休み期間中に小学生を対象とした地球研キッズセミナーをはじめました。専門用語や難しい概念を使用せず、環境の大切さを伝えるよう努めています。外国の生活や調査の様子を研究員から直接聞けるということで参加者からは好評をいただいております。



第44回地球研市民セミナー「地球環境学へのいざない—研究の裏舞台」

テーマ	開催日	講演者
第43回 東日本大震災 — 被災者主体の復興への道筋	2011年5月19日	室崎益輝 (関西学院大学災害復興制度研究所所長) 窪田順平(地球研准教授)
第44回 地球環境学へのいざない — 研究の裏舞台	2011年8月5日	谷口真人(地球研教授) 渡邊三津子(地球研プロジェクト研究員) 榎林啓介(地球研プロジェクト上級研究員)
第45回 石油資源がなくなったとき、 どうやって生活していきますか? — その3	2011年9月9日	大沼洋康(国際耕種株式会社代表取締役) 中西昭雄(中西木材株式会社代表取締役) 縄田浩志(地球研准教授) 石山 俊(地球研プロジェクト研究員)

● 地球研キッズセミナー

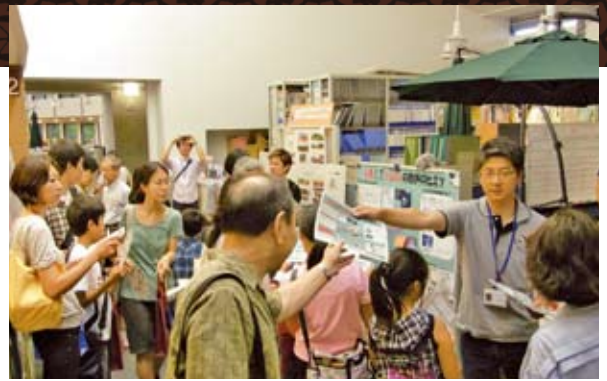
テーマ	開催日	講演者
第2回 熱帯雨林の不思議な生き物たち	2011年8月5日	湯本貴和(地球研教授)



第2回地球研キッズセミナー「熱帯雨林の不思議な生き物たち」

● 地球研オープンハウス

地球研では2011年度から、広く地域のかたがたとの交流を深めるために、地球研の施設や研究内容を紹介するオープンハウスを開催しています。2011年度は市民セミナーおよびキッズセミナーとの同時開催とし、スタンプラリーやプロジェクト訪問等、地球研内を自由に歩き回りながら楽しく身近に感じていただけるよう工夫しました。



2011年度地球研オープンハウス プロジェクト訪問

		開催日	場所
2011年度	地球研オープンハウス	2011年8月5日	地球研
2012年度	地球研オープンハウス	2012年8月3日	地球研

● 地球研地域連携セミナー

国内の大学や研究機関と協働で行うセミナーです。地域には地域固有の環境問題があります。一方で、世界のほかの地域でも同様の環境問題が見られます。世界と日本で共通する課題について、地元の大学・研究機関・行政とともに、問題の根底を探り、解決のための方法を考えてゆくセミナーです。



第10回地球研地域連携セミナー
「水辺の保全と琵琶湖の未来可能性」

	テーマ	開催日	場所
第9回	ユーラシアへのまなざし：ソ連崩壊20年後の環境問題	2011年 6月12日	北海道札幌市
第10回	水辺の保全と琵琶湖の未来可能性	2012年 1月14日	滋賀県大津市
第11回	東アジアの「環境」安全保障：風上・風下を超えて	2012年 6月10日	福岡県福岡市
第12回	入会(いりあい)から世界を変える(仮題)	2012年10月13日(予定)	山梨県富士吉田市

● その他

地球研では、その他に次のようなイベントを行政組織、経済団体、学術・研究機関等と連携して開催し、「総合地球環境学」の構築へ向けて幅広く議論を行っています。

地球研東京セミナー

地球研の成果と今後のさらなる進展について、国内の研究者コミュニティ等に理解と協力を呼びかけていくため、東京でのセミナーを開催しています。日本を代表する研究者や現場の問題を扱う行政関係者等を招いて、最新の成果と課題を討論します。2011年度は国際森林年にあわせて「森林」をテーマとし、東日本大震災に伴う節電要請のため、会場を国立京都国際会館に移して開催しました。



第3回地球研東京セミナー「遠い森林、近い森：関係性を問う」 写真提供：産経新聞社

	テーマ	開催日	場所
第3回(人間文化研究機構第17回公開講演会・シンポジウム)	遠い森林、近い森：関係性を問う	2011年10月7日	国立京都国際会館
第4回(人間文化研究機構公開講演会・シンポジウム)(予定)	コモンズの新天地(仮題)	2013年1月25日(予定)	有楽町朝日ホール(予定)

日教研・地球研合同シンポジウム

本シンポジウムでは、人間文化研究機構における新しい人間文化研究の可能性として、日本文化の研究が地球環境問題にいかなる貢献をすることができるかについて提案することを目的としています。

日本文化と地球環境問題、大きく異なる2つの分野の研究を行う国際日本文化研究センター(日教研)と地球研が中心となり、地球環境問題の本質について積極的に対話しています。



第4回日教研・地球研合同シンポジウム「環境問題はなぜ大事か——文化から見た環境と環境から見た文化」

	テーマ	開催日	開催場所
第4回	環境問題はなぜ大事か ——文化から見た環境と環境から見た文化	2011年5月21日	日教研講堂

京都環境文化学術フォーラム・国際シンポジウム

地球温暖化をはじめとする地球環境問題を解決するため、京都府、京都市、京都大学、京都府立大学等とともに、環境・経済・文化等の分野にわたる国際的な学術会議を2009年度から開催しています。生活の質を高めながら自然との共生や持続可能な社会を形成する新たな価値観や経済・社会のしくみを、京都から世界に向けて発信・提案することを目的としています。本国際シンポジウムは、「京都地球環境の日(2月16日)」の記念行事と位置づけ、「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式と同時に毎年2月中旬に国立京都国際会館で開催しています。



京都環境文化学術フォーラム「グローバルコモンズを目指して—東日本大震災の経験から考える未来への道」スペシャルセッション。基調講演を行う中沢新一氏(人類学者、明治大学野生の科学研究所所長)と、講演に聞き入るリリースピーチ講演者の結城幸司氏(WIN-AINU副代表、アイヌ・アートプロジェクト代表)、BGM演奏者・福本昌二氏(アイヌ殿堂楽器トンコリ奏者)



KYOTO 地球環境の殿堂

「京都議定書」誕生の地である京都の名のもとに、世界で地球環境の保全に多大な貢献をした実務家、研究者等の顕彰を行います。その功績を永く後世にひきつぎ、京都から世界に向けて広く発信することにより、地球環境問題の解決に向けたあらゆる国、地域、人々の意志の共有と取組の推進に資することを目的としています。本顕彰は、「KYOTO 地球環境の殿堂」運営協議会(京都府・京都市・京都商工会議所・環境省・国際高等研究所・国立京都国際会館・地球研)が中心となり、環境分野の専門家、学識者、活動家等で構成する選考委員会で選考されます。



「KYOTO 地球環境の殿堂」運営協議会会長を務める立本成文地球研所長より表彰状を授与されるレスター・R・ブラウン氏



西陣織肖像(殿堂入り記念品)の前で握手するクラウス・テプファー氏と立本所長

	受賞者	職位	業績
第3回	クラウス・テプファー氏	先端的持続可能性研究所所長	UNEP(国連環境計画)の事務局長として、地球環境保全の具体的な施策を推進した
	レスター・R・ブラウン氏	アースポリシー研究所所長	エネルギーや人口・食料問題などに警鐘を鳴らし、地球環境問題の思想を普及させた

地球研セミナー

国内・海外の研究機関で地球環境関連の研究を行っている精鋭の研究者を講師として招へいし、地球環境学に関わる最新の話題と研究動向を共有することにより、広い視座から地球環境学を捉えようとするセミナーです。セミナーは所外にも開かれており、所員だけではなく関連分野の研究者も多数参加しています。

談話会セミナー

原則月2回、昼休憩を利用して行うランチ・セミナーです。地球研で求められているのは、多様な研究分野間の相互理解と、共通テーマである地球環境問題に関する不断の議論です。談話会セミナーでは、地球研の若手研究者が中心となって、各自の研究背景を踏まえつつ、多くの所員に共通の話題を提供し、研究者相互の理解と交流を深めています。

国連子供環境ポスター

地球研では、世界中の子どもたちが描いた環境に関するポスターを所蔵しています。その数約20万点。1991年から毎年開催されている『国連子供環境ポスター原画コンテスト』（主催：国連環境計画、地球環境平和財団ほか）の全応募作品が寄贈されています。優秀作として選ばれた作品は、国連本部で展覧会を行い、絵葉書やカレンダーになっています。

応募作品の一つ一つに、地域・民族・年齢の異なる子どもたちの自然や環境保全についての考えが反映されています。この貴重な資料を活用して、これまで日進市西小学校（愛知県）、金沢大学附属小学校（石川県）、河合第三小学校（奈良県）、立命館小学校（京都府）、Atorium 小学校（ケンブリッジ、USA）、ボストンこども博物館（ボストン、USA）、台東大学附属小学校（台湾）、同志社小学校（京都府）、フランス水アカデミーとの共催による第6回世界水フォーラムでワークショップを実施してきました。自分たちで展覧会を開催したり、かるたを作ったりしながら、子どもたちは、地球環境についての世界の子どもたちの思いについて学んでいます。



2012年3月にフランスで行われた第6回世界水フォーラムでの展示の様子

● 刊行物

地球研叢書

地球研の研究や成果を学問的に分かりやすく紹介する出版物です。

タイトル	著者・編者	出版社	出版年月
生物多様性 どう生かすか — 保全・利用・分配を考える	山村則男 編	昭和堂	2011年10月
食と農の未来 — ユーラシア一万年の旅	佐藤洋一郎 著	昭和堂	2012年3月



地球研英文叢書

地球研の研究成果を国際社会に向け広く発信する、英文での出版物です。

タイトル	著者・編者	出版社	出版年月
Island Futures	BALDACCHINO, Godfrey・NILES, Daniel 編	Springer	2011年7月

地球研ニュース (Humanity & Nature Newsletter)

地球研として何を考え、活動を行っているのか、またどのような所員がいて、いかなる研究活動をしているか等の最新情報を、研究者コミュニティに向けて発信するもので、隔月で刊行しています。特に地球研に関わっている内外の研究者を対象に、コミュニケーションの場の1つとして機能することを目指しています。



地球環境学事典

2011年に10周年を迎えた地球研は、その節目として『地球環境学事典』（弘文堂）を編集・刊行しました。広いスペクトルをもつプロジェクトの成果を、地球研として1つのまとまった「事典」という形で公表しました。地球環境問題のさまざまな課題について、単なる解説ではなく、これからどのように対応してゆかなければならないのか、「考えさせる」事典を目指しました。専門用語に頼らず、平易な言葉で高校生にもわかるようにする等、工夫を凝らしています。

人間文化研究機構のなかの地球研

地球研は、国立大学法人法に基づき、2004年4月1日に設置された大学共同利用機関法人人間文化研究機構（地球研のほか、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、国立民族学博物館、以下、機構）の一員となりました。地球研としての独自の研究を推進する一方、機構の進める連携研究、研究資源共有化推進事業、地域研究推進事業等の新規事業に加えて、公開講演会・シンポジウムなど、同機構主催の諸事業や共同利用活動に積極的に関わっています。とくに、連携研究「日本およびアジアにおける『人と自然』の相互作用に関する統合的研究：コスモロジー・歴史・文化」を地球研、日文研、国語研が中核機関として進めています。また、機構による地域研究推進事業「現代中国地域研究」の一拠点として、「中国環境問題研究拠点」の研究活動を進めています。

人文社会系の研究機関を中心とする機構のなかで、地球研は自然系アプローチを含む統合的な地球環境学の研究を人間文化の問題として位置づけ、重層的かつ多面的な共同研究・共同利用を行う機関として未来に向けて大きな可能性を秘めています。

● 連携研究「日本およびアジアにおける『人と自然』の相互作用に関する統合的研究：コスモロジー・歴史・文化」



小雪のちらつく中でのもずく漁(能登島・石川県)

本研究は、人間文化研究機構の連携研究として行うものです(通称「人と自然」)。「人と自然」の研究では、人と自然の多様なかわりを考古、歴史、民族(俗)、環境、思想などの多様な観点から解明することを目指しています。とくに、日本や広くアジア地域における集団を対象として、それぞれの集団が自然とのかわりの中で育んできた歴史や文化とその体系としてのコスモロジーに注目して研究を実施します。人は自然界の資源を生活や生存のために利用するだけでなく、自然を模倣し、あるいは自然を映す独自の表象として、技術、絵画、詩歌、造形物などをとおして自らの文化に取り込んできました。歴史的に多様な形で展開してきた人と自然の相互作用を、多面的なアプローチから明らかにすることが研究の大きなねらいです。

この連携研究には、地球研のほか機構に属する5つの機関の研究教育職員や、全国の国公立大学の教員が共同研究者として参画しています。本研究は2010年6月に開始し、共同研究会、現地調査を開催してきました。2012年度以降も、日本国内各地やアジア地域を対象とした調査研究を実施します。

研究組織として、言語を中心とする自然認識や民族(民俗)分類を扱うグループ、絵画・図像などの造形物や儀礼、民間伝承、民俗知などを中心に扱うグループ、自然の開発や管理をめぐる制度や慣行を扱うグループに分けて、研究を進めています。

また、研究連絡誌として『人と自然』を年に2冊発行することとしました。創刊号では特集として「火」を取り上げ、火を主題とする人と自然の多様なかわりを独創的な視点から展開しました。つづいて、第2号(特集:音をめぐる人と自然—音とことばの接点)、第3号(特集:虫をめぐる人と自然—虫にこめられた多様な意味)を刊行しました。2012年度も人と自然にかかわる特集として、第4号では「天」を幅広い視点から取り上げる予定です。それ以降も興味ある課題を企画していきます。



『人と自然』第3号
虫をめぐる人と自然
—虫にこめられた多様な意味

● 中国環境問題研究拠点

総合地球環境学研究所中国環境問題研究拠点は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の現代中国地域研究推進事業の一環として、全国6つの大学や研究所に設置された研究組織の1つです。現代中国地域研究は、日本における現代中国研究のレベルアップ、学術研究機関間のネットワークの形成、次世代の研究者養成を目的として、地球研の他に早稲田大学、慶應義塾大学、東京大学、東洋文庫、京都大学に設置されたネットワーク型の拠点形成事業です。2007～2012年度の第I期5年が終了し、2012年度から第II期がはじまります。

地球研では地球環境問題の解決に資する複数の研究プロジェクトを中国各地域で実施しています。これら地球研の研究プロジェクトの成果を、「開発による文化・社会の変容」という視点から、中国の環境問題を自然・人間文化の両面にわたって相対的に捉えようとしています。具体的には毎年中国環境問題に関わる異なるテーマを設定し、各種研究会やフォーラム、国際シンポジウムを開催してきました。2007年度は「水」、2008年度は「食と農」、2009年度は「都市と農村」をテーマとしました。2010年度は地球研のプロジェクト「熱帯アジアの環境変化と感染症」と協力して、「エコヘルス」と経済的に影響力を拡大する中国の最前線の1つである「西南中国」をテーマとしました。2011年度は新たなネットワーク形成と地球研プロジェクトのシーズの発掘を行うことを目的に、中国の大学と共同で、大学院生を対象とした「地球環境学講座」を開講しました。地球研内外の拠点構成員を中心として講師陣によるリレー講義の形式で、2011年12月には南京大学環境学院で、2012年2月には北京大学で行いました。南京では、大学院生対象の講義だけでなく、江蘇省や無錫市などの環境行政担当者への講義も行い、さまざまなレベルでの対話から、環境問題をともに考える試みとしました。

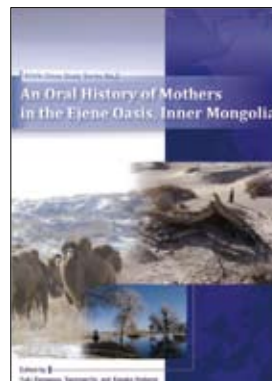
また、国内では、3.11東日本大震災以後、大きな関心事項となった中国の原子力発電事業の状況に関する研究会をいち早く開催するなど、新たな研究シーズの発掘に努めました。こうした活動を通じて中国環境問題に関わるさまざまな国内外の研究機関、研究者とのネットワークを築きつつあります。

2012年度からはじまる第II期では、第I期で培ったネットワークを基礎に、中国を中心とした周辺各国を含む東アジア圏を視野に入れ、中国においても今後予想される少子高齢化を考慮し、住民の生活基盤の補償とリージョナルな資源開発・環境保全とを両立させる「グローバル化する中国環境問題と東アジア成熟社会シナリオの模索」をテーマとして、研究を進める予定です。

設立当初より、ニュースレター『天地人』を定期的に発行し、本研究拠点での成果を発信するとともにネットワーク形成に努めてきました。また、2011年度には、研究成果報告書シリーズの第2号として、『An Oral History of Mothers in the Ejene Oasis, Inner Mongolia』を発刊したほか、2011年2月に地球環境の殿堂で表彰された原田正純先生の著書『水俣病』の中国語訳の発刊に協力しました。



2012年2月に北京大学で開催された地球環境学講座



研究成果報告書シリーズの第2号として、『An Oral History of Mothers in the Ejene Oasis, Inner Mongolia』を発刊

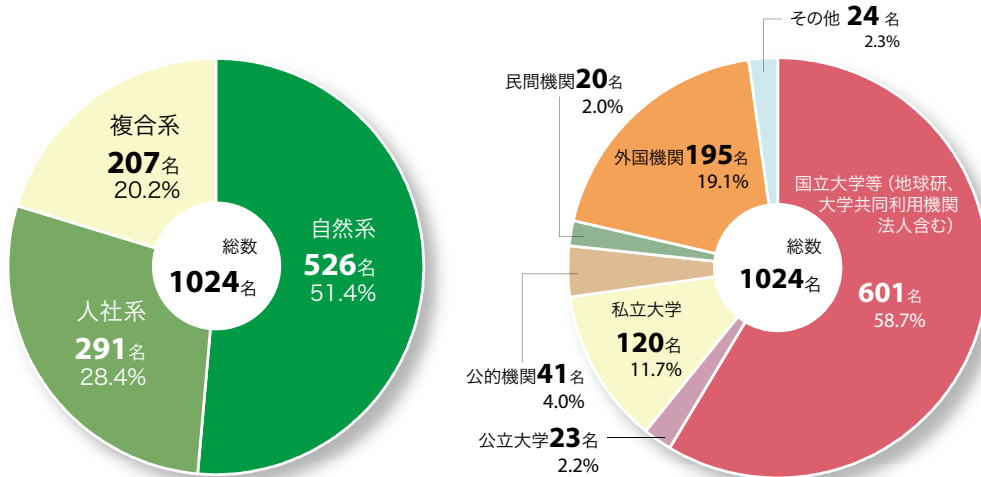


地球環境の殿堂で表彰された原田正純先生の著書『水俣病』

共同研究

● 共同研究者の構成比率

地球研は大学共同利用機関として、地球環境学に関わる多くの分野・領域を横断する総合的な共同研究を推進するため、我が国の大学をはじめ、各省庁、地方公共団体(公的機関)や民間の研究機関、さらには海外の研究機関と密接な連携を図っています。



研究分野構成比率

所属機関構成比率

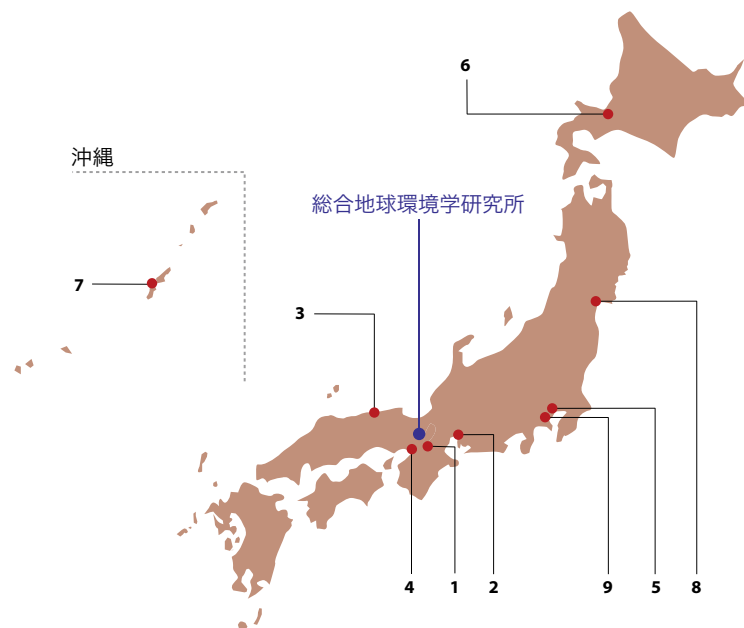
(2012年3月31日現在)

● 国内の連携研究機関

地球研では、以下に示す全国9つの研究機関などと人事交流をともなう連携を図って研究を進めてきました。第Ⅱ期中期目標・中期計画期間においては、より多くの大学や研究機関と積極的に連携を深めていきます。これら9つの研究機関以外に2009年度には名古屋大学大学院環境学研究科と連携大学院に関する協定を結び、2010年度には九州大学東アジア環境研究機構と学術交流に関する包括的な協定書を取り交わしました。

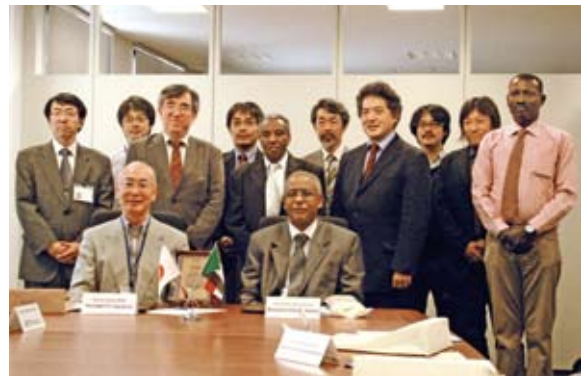
連携研究機関

1. 京大生態学研究センター
2. 名古屋大学地球水循環研究センター
3. 鳥取大学乾燥地研究センター
4. 国立民族学博物館
5. 東京大学生産技術研究所
6. 北海道大学低温科学研究所
7. 琉球大学熱帯生物圏研究センター
8. 東北大学大学院理学研究科
9. 横浜国立大学大学院環境情報研究院



● 海外の連携研究機関

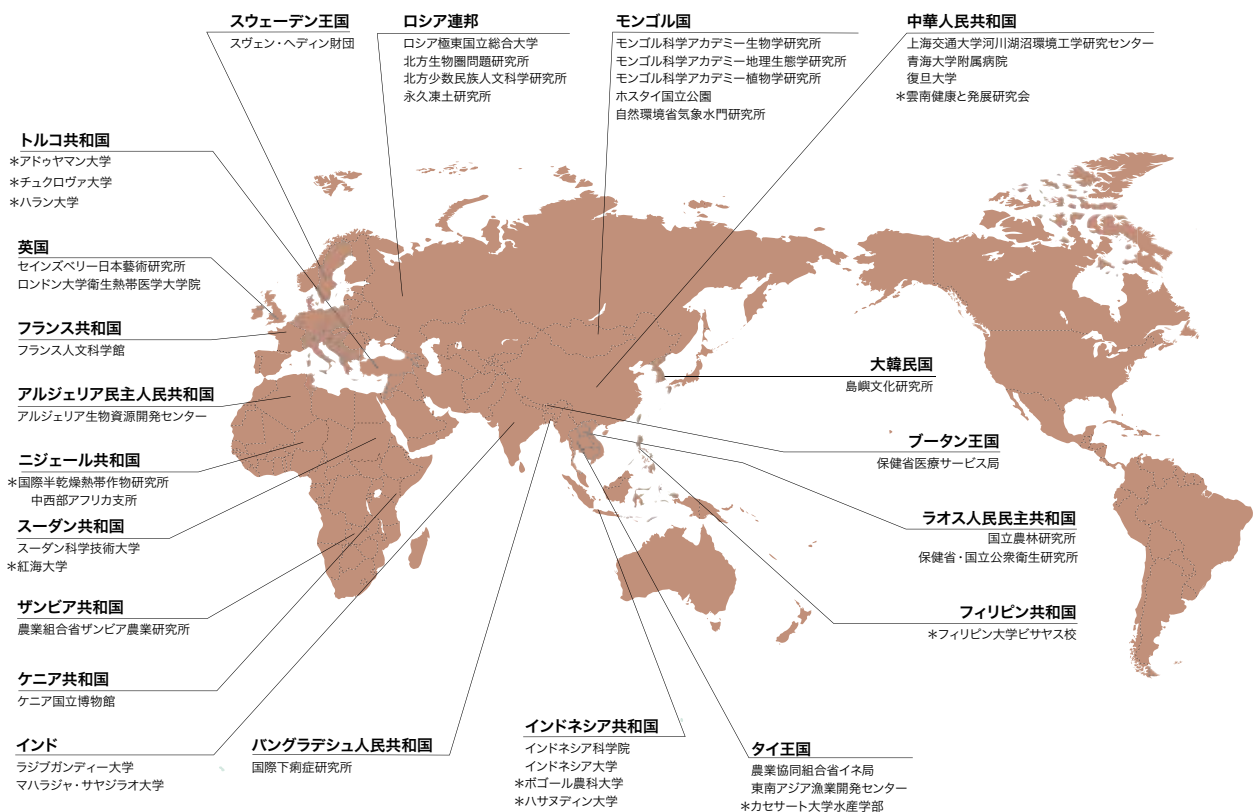
地球研では、海外の研究機関・研究所などとの間で積極的に覚書および研究協力協定を結び、共同研究の推進、研究資料の共有化、人的交流などを進めています。また、海外の研究者との連携をさらに密にするため、招へい外国人研究員として各国から多数の著名な研究者を招いています。なお、2011年度は、インドネシア、スーダン、タイ、中国、トルコ、ニジェール、フィリピンなどの海外の研究機関と10の覚書または研究協力協定を締結しました。



紅海大学(スーダン共和国)との覚書締結(2011年10月)

覚書および研究協力協定の締結 (2012年4月1日現在)

*は2011年度に覚書を締結した研究機関



疾走

隠岐の島町の
玉若酢神社の御霊会では、
各神社から総社に勇壮に
ウマを駆け込ませる「馬入れ」
という見どころがある
〈湯本貞和〉



琵琶湖の夕暮れ

サンプリングに行った、琵琶湖の水鳥・湿地センター
〈本庄三恵〉

少女とお坊さん、ラオスにて
〈ZEBALLOS VELARDE, Carlos Renzo〉

